**書評『華北の万人坑と中国人強制連行－日本の侵略加害の現場を訪ねる』**

**（花伝社、2017年）**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　遠藤美幸

**はじめに**

「万人坑（まんにんこう）」とは何か。日本軍の中国侵略下における虐殺や強制労働による被害者が埋められている「人捨て場」のことをいう。被害者数が膨大で万人単位にのぼることから、中国では「万人坑」と呼ばれ、この「人捨て場」が中国本土の至るところに今も残っているのだ。著者の青木茂さんは、「万人坑」に関する著作をすでに三冊書いており[[1]](#footnote-1)、今回は万人坑シリーズの4冊目にあたる。青木さんは、これまでに30数か所の万人坑を実際に訪れている。日本で最も万人坑の現状に詳しい在野の研究者といえるだろう。そして、これまでの三冊は、中国の東北地方（とくに「満州国」を中心）の万人坑の実態の紹介であったが、４冊目では、東北より中国人労働者の被害者数が多い華北の万人坑がはじめて紹介された。本書は、2013年9月に、青木さんが華北の万人坑の侵略加害の現場を実際に訪ね歩いた実録と加害の詳細な解説が「被害者の目線」で記されている。万人坑を何としても日本人に知らしめたいという著者の執念を感じずにはいられない労作である。中国の万人坑研究の専門家らが、青木さんの「万人坑を知る旅」の良きガイド役であり、万人坑研究の指南役である。青木さんと万人坑を介した中国側の研究者との長年の信頼関係が万人坑の生存者や遺族との出会いに繋がり、本書を通じて私は被害者のあまりに重い証言を聞くことができた。

**問題意識と本書の意義**

戦時下での中国人労働者への虐殺や強制労働の実行者は日本軍だけではなかった。本書ではむしろ、軍隊を用心棒に経済的略奪（金儲け）を増幅させてきた日本の民間企業の加害責任の重大さを一貫して主唱している。昨今では、世界各地で経済支援や援助という名のもとの経済的略奪や軍事兵器の製造や販売などが横行しており、日本もまた人命より金儲けが優先される「戦時期」に舞い戻ろうとしているかのようだ。本書は、70数年前に万人坑がなぜ増幅し続けたのか、その不合理で悲惨な史実を明らかにすると同時に、万人坑を知ることはすなわち、現代の日本社会の行く末を考える重要な題材となり得ることを啓示している。

本書の最後に「補論1,２」として、青木さんが華北地方の山西省盂県の性暴力被害者の女性たちと直接面会した実録（補論1 2008年11月、補論２ 2009年3月）が収められている。万人坑と女性に対する性暴力犯罪は無縁ではない。日本帝国主義の中国住民への苛烈な暴力支配の実態を深く知るためにも本書の「補論」は不可欠で、戦時期の女性への性暴力は現代社会でも全く解決されていない現代的かつ国境を越えた深刻な問題であることを改めで痛感する。

**なぜ華北地方の中国人労働被害者が甚大なのか**

アジア太平洋戦争期の中国本土における中国人強制連行や強制労働による中国人労働被害者の実態に熟知している日本人はどれほどいるだろうか？日本で話題になっている中国人強制連行・強制労働の問題とは、日本国内における強制連行・強制労働の中国人労働被害者がもっぱら話題の中心である。青木茂さんによると、日本国内に強制連行された中国人労働被害者は約4万人であるのに対し、中国本土で日本の民間企業（鉱山や土建工事現場など）が行った強制連行・強制労働による中国人労働被害者は、東北（「満州国」）で1640万人、華北で2000万人にも上り、日本国内被害者の900倍という途方もない桁数の被害者数が推定されている。にもかかわらず、一般的な日本人は、この衝撃的な加害の事実を何ひとつ知らずにこの70数年を経てきたのである。

華北地方の労働被害者数が、傀儡国家「満州国」のある東北を勝っているのには明白な理由がある。炭鉱や鉄鋼の豊富な華北は、アジア太平洋戦争を遂行するための「戦争資源の中心的な供給基地」であった。華北の資源と食料と労働力の暴力的な略奪が日本の侵略戦争の遂行を支えた。華北の住民は、自国の侵略遂行のために使い棄てられた。鉱山や土建工事現場などでの強制労働は過酷で凄惨だ。劣悪な環境での長時間労働、過労と飢えによる衰弱や傷病が主因で、多数の労働者が死んでいった。その膨大な遺体が（中には生きていながらにして）虫けらのごとく万人坑に捨てられたのである。

以下、本書に収められている華北の万人坑の実態についてその一部を紹介しよう。

**＜大同炭鉱万人坑＞**

大同は、山西省では省都・太原に次いで大きい町だ。品質、埋蔵量も中国屈指の炭田をもつ大同炭鉱は、日中戦争開始の翌年には満鉄が経営に乗り出し、資源と経済の略奪が開始された。増産採掘のためには安価な大量の労工が不可欠で、満鉄主導で傀儡組織と通じて労工の強制連行とその先の奴隷労働が実行された。過酷な労働に耐えかねた逃亡を阻止するため、憲兵隊や鉱山警察隊を各所に配置し、電気が流れる鉄条網を張り巡らした。毎日、12時間から15時間におよぶ連続長時間労働の強要は耐え難い苦痛を伴った。逃亡者は見せしめのために柱に縛り付け生きたまま狂犬の餌食にされた。大同地区では約6万人余の労工が犠牲者となり、炭鉱の至るところが人捨て場（万人坑）となった。捨てられた遺体は野晒しで野犬に食い散らかされ、月日の経過とともに累々の白骨の山が形成された。

本書掲載の大同炭鉱地区の万人坑のある一枚の写真を見て私は驚愕した。煤峪口南溝万人坑のミイラ化した遺体の写真だ。ぼろ服を身にまとい生のあったであろうその時の完全な形でミイラ化された犠牲者の訴えかけるような歪んだ表情を忘れることができない。これこそ、日本占領下の経済的侵略の惨たらしさの決定的証拠であり、彼らは死んでもなお日本に戦争犯罪の責任を突き付けている。

**＜塘沽集中営（強制収容所）万人坑＞**

天津市の中心から40キロほど離れたところに、塘沽の万人坑記念碑がある。塘沽集中営（強制収容所）で死亡した中国人が棄てられ万人坑にされた地だという。1942年1月に、天津に華北労工協会天津事務所塘沽分室が設置されるが、その任務は天津や塘沽の民衆を捕らえて、日本軍の軍事施設工事や「満州国」などに送り込むことであった。一方で、1943年に、塘沽港に日本に送り込むための中国人労工収容所が建設された。塘沽集中営は、天津および近隣の行政府から供出された労工の収用と訓練を行う施設で、その所長や職員は日本人であった。この塘沽集中営における中国人労工に対する虐待や虐殺は言葉にして書くのもつらいものだ。日本人職員や日本兵は気晴らし感覚で、労工を玩具のごとく虐待した。日本陸軍の「内務班」を超える虐待の中身である。殴打や罵声はもちろんだが、飲食も十分でなく、とくに飲み水の制限は生存を脅かすものであった。飲む水を確保できない衰弱者は、健常な者の小便を哀願して飲んだという。着たきりの衣服はボロボロで、一つの部屋に数百人が押し込められ居住場所は異臭と汚物が充満し、冬でも破れた毛布を少し配布されるに過ぎなかった。まさに集中営は「労工の地獄」である。集中営では毎日死者が出た。劣悪な状況に耐えかねて暴動も後を絶たなかった。死者数が日に日に増大し、二年に満たない期間に1万人以上の犠牲者が出たといわれ、その遺体はあちこちの人捨て場に無造作に遺棄され、飢えた犬の餌食とされたのである。本書には他に9か所もの万人坑を含む日本の侵略戦争の惨たらしい証拠が記されている。

**女性に対する戦時性暴力**

私はビルマ戦場の一つである中国雲南省の拉孟（らもう）戦場の研究者であるが、2000メートルの山上の陣地にも軍は慰安所を設置し、20名の若い女性たち（日本人5名、朝鮮人15名）が戦時性暴力に晒された[[2]](#footnote-2)。その一人の朴永心さん（1921-2006年）は、妊娠させられ、砲弾の降り注ぐ地獄の戦場から奇跡的に生還した。

本書の補論に登場する万愛花さん（1930-2013年）には、私は文字や映像や写真の中でしか会うことができなかった。戦時性暴力の実態に関心をもつ一人として、直接、万愛花さんのような女性たちやその家族に会って話が聞けた青木さんの体験は得難い貴重なものだ。

どのような女性たちが戦時性暴力の被害にあったのか。日本の植民地では、若くて健康で性病のない（処女の）女性が対象とされた。多くは農村の貧しい家庭の娘で、初潮前の12、3歳の少女もいた。軍に選ばれた業者や巡査（憲兵）によって「お金が稼げる仕事がある」など巧みに騙され連れてこられた。北朝鮮出身の朴永心さんはこのケースである。

一方で、中国やフィリピンなどの占領地では、暴力的な連行がほとんどで、八路軍の抗日派の妻や娘が拉致され、長期的に継続的に輪姦や拷問を受けた。山西省盂県の万愛花さんはこのケースである。15歳で抗日村の副村長となる筋金入りの抗日戦士の万愛花さんへの日本軍の蛮行は凄まじいもので、度重なる強姦と激しい拷問で体中が骨折し意識を失い、ついには骨盤の骨折で背丈が20センチ縮んだ。

2008年11月、山西省盂県の性暴力被害者の女性たちをはじめて訪ねた青木さんは、「大娘（ダーニャン）」[[3]](#footnote-3)と大娘の娘らと『山西省における日本軍性暴力の実態を明らかにし、大娘たちと共に歩む会（「明らかにする会」と略称）』[[4]](#footnote-4)という民間団体の人たちとの心温まる交流の場に同席できたことが一番嬉しかった」と記している。日本の加害の実態を明らかにする取り組みは、ほとんどが市民の手に委ねられているのが現状だ。

**むすびにかえて**

日本では、もっぱら戦争を語れば自国の被災・被害体験が主流であって、アジア諸国への加害を語ることは極めて少ない[[5]](#footnote-5)。ましてや加害国としてきちんと戦争責任に向き合ってきたような国ではない。そういう国にした指導者を選んだのは「私たち」でもあるのだ。

市民団体による平和活動の謳い文句は、「二度と戦争をするような国にしてはいけない」が定番だ。この謳い文句に対して、青木さんは、「戦争をしてはいけないのではなく、『侵略戦争』をしてはいけないのだ」という。八路軍は日本の侵略に対して抵抗した。彼らの抗日戦も「してはいけない戦争」といえるだろうか。日本人が被った戦争被害は未曾有の惨状であったことも承知している。しかし、日本の平和を求める市民運動に、戦時期の万人坑や性暴力の実態の究明というような加害項目が組み込まれれば、国境を越えて被害者の交流と連帯が可能となり、将来に向けて根本的な解決に繋げることができるだろう。これは先に述べた「明らかにする会」が証明している。

日本は中国に対してかつて甚大な戦争犯罪行為を行った。一方で、かつて米国も二度にわたる原爆投下という未曽有の戦争犯罪行為を日本に行った。よって日本は、米国に原爆投下の加害責任を問う立場でもある。にもかかわらず米国に追随してこの夏、日本は核兵器禁止条約に反対の立場をとった。アンビバレントな日本の対応に世界は当惑している。日本がアジアでの戦争犯罪に真摯に向き合い、米国に原爆投下の戦争責任を問うことを願う。

あとがきで、著者の青木さんは「日本国内の強制連行や強制労働の研究は進んでいるが、中国本土（大陸）における中国人強制連行・強制労働について研究する専門家・研究者がいないのではないか」と訴えている。青木さんは自身を万人坑研究の「素人」と謙遜するが、これは間違いだ。研究者を養成する大学院を出れば卓越した万人坑研究ができるのではない。生活者としてふつうに暮らしていた人びとが理不尽に命を絶たれ、万人坑に遺棄された。研究で大切なのは理不尽に殺された無辜の声を明らかにしたいという飽くなき情熱であって、本から得た知識ではないように思う。専門家や研究者に任せたからといって万人坑の本が4冊も世に出せたとは限らない。この本は、「素人」が、理不尽な死に対する憤怒と真の平和を希求する愛をもって書かれた本で、出来栄えは万人坑研究の第一人者に匹敵する。

遠藤美幸

（神田外語大学非常勤講師、日吉台地下壕保存の会運営委員、不戦兵士・市民の会理事）

1. 『二一世紀の中国の旅―偽満州国に日本侵略の跡を訪ねる』日本僑報社、2007年

　『万人坑を訪ねる―満州国の万人坑と中国人強制連行』緑風出版、2013年

　『日本の中国侵略の現場を歩く―撫順・南京・ソ満国境の旅』花伝社、2015年 [↑](#footnote-ref-1)
2. 拉孟戦については、拙著『「戦場体験」を受け継ぐということ－ビルマルートの拉孟全滅戦の生存者を尋ね歩いて―』（高文研、2014年）を参照されたい。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 山西省の農村の人たちが親愛の情を込めて高齢の女性を「おばあちゃん」と呼ぶときの呼称。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 1996年10月に、山西省の黄土高原の農村に入り、日本軍による性暴力の被害実態の調査を本格的に開始。当会の代表は石田米子氏。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 戦後、加害証言を積極的に展開した最も有名な団体は、中国帰還者連絡会（略して中帰連）の元兵士による加害証言である。彼らはシベリア抑留から1950年に戦犯として中国に引き渡され撫順戦犯管理所に収監されるが（他に太原戦犯管理所に収監された戦犯がいる）、中国の寛大政策で一人の死刑判決もなく1964年までに全員が帰国する。1957年に中帰連を立ち上げ、加害証言と反戦、日中友好を行った。2002年に若い世代が「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」を立ち上げ、中帰連の活動を継承。 [↑](#footnote-ref-5)